

『萬葉集』の春の花と閨怨詩

——卷十「詠花」歌一首の本文批評をめぐって——

河上志貴子

はじめに

詩歌であれ、物語であれ、日本文学の随所に、花に触れた詞章を見出すことができる。日本人は、古来より、色や香り、開花から落花まで、花のあらゆる様相に関心を寄せ、様々且つ巧みに文学の領域に取り入れてきた。

…在原業平は、その心余りて、言葉足らず。萎める花の、色無くて、匂ひ残れるがごとし。…

〔古今和歌集〕・〔仮名序〕
東風吹かばにほひをこせよ 梅花 主なしとて春を忘るな

〔拾遺和歌集〕・雑春・菅原道真・一〇〇六
祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。婆羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。…

〔平家物語〕・卷第一

春日山懐古

春日山頭晚霞鎖し、

騷騷嘶き盡して啼鴉有り。

惜む君が獨り能州の月を賦し、

平安城外の花を詠ぜざりしを。…

見ずやあけぼの露浴びて、われにも言ふ桜木を、

見ずや夕ぐれ手をのべて、われさしまねく青柳を。

〔花〕・武島羽衣

花は、単に景物として文に取り入れられる場合も勿論あるが、いわば一つの文学的デバイスとして詠み込まれる場合もある。右の古今集序や、『平家物語』冒頭にあるように、比喩的に用いられる場合もあれば、道真の名歌や武島羽衣の「花」のごとく、擬人化される場合もしばしばある。能登の七尾を攻め落とした戦国武将上杉謙信が、京都に進軍する直前に急死したため、平安京の花見ができなかったことに対し、大槻盤溪は、謙信の名高い「九月十三夜」

を想起させ、能州の月を賦したように、京の花を詩にできなかったのは、何と惜しいことかと、巧みに表している。

花や月というものは、単に愛でるだけのものではなく、詩歌にこそ詠うべきものと捉えられてきたことが、こうした作から窺い知れる。藤原定家の作に、「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋とまやの秋の夕暮ゆふぐり」（『新古今和歌集』・秋歌上・三六三）という名歌があるが、本来ならば「見わたせば」の続きとして、花や紅葉の描写が期待されるころへ、「なかりけり」といった斬新な逆転をもたらしていることよって、よく知られる。しかし、そればかりでなく、花や紅葉などは、文学に用いるに殊に相応しい素材であるという、古来よりの観念が固定していただけに、定家の歌は人々に大きなインパクトを与えたと考えられないだろうか。敢えて言い換えるとすれば、確固たる伝統として連綿と続いてきた「花」と日本文学との関係あつてこそその名歌である、ということになろうか。

また、花が素材として詩歌などの文学に用いられる場合、その文の中でどのような機能・役割を果たしているかを検討する際に、その用法がどのような思想・発想によるものかについても、考察する必要があるであろう。そのような考察を行うことよって、花が如何なる意味合いを託されているかを見極めるのに、一つの重要な手掛かりを得られる場合がある。次の歌は、『萬葉集』巻十の春の雑歌に収

められている、「詠花」歌群の一首である。

去年こぞ咲さ之ま久木きま今いま開ひらく 徒た土つち哉いか將まさ墮おち見み人ひと名な四よ二に

（一八六三）

右の歌に関しては、二句目の「久木」が、通常夏季に開花する植物とされるため、「花を詠む」春の歌に配列されていることと一致しないことから、従来問題として注目されてきた。しかし、現在のところこの問題は未解決のままである。

本稿では、集中において、春の花が、どのような機能・意味合いを持つものか、また、「久木今咲く」「地にか落ちむ」と右の一首にも描かれているように、春の花の開花や落花というものが、歌の中でどのような役割を果たしているのかを検討してみたい。その考察を踏まえて、改めて右の「久木」の問題に着手し、解決を試みたいと思う。

一

当該歌の問題箇所は、諸本には「久木」（ひさき）と伝わっている。本文、訓、共に異同は見られない。

しかしながら、この「久木」が何の木を指すかについては、意見が分かれている。まず、諸家が指摘しているように、『新撰字鏡』は、「楸」の字に「比佐木」の訓を施しており、『倭名類聚抄』も、同じ「楸」に対して「漢語抄

云比佐木 木名也」と解説している。『類聚名義抄』や『倭玉篇』の場合も、「楸」に「ヒサキ」の和訓が施してあり、一致している。ところが、この「楸」という木の正体を明らかにするのは、容易なことではないようである。大凡、キササゲ（のうぜんかずら科の落葉高木）、または、アカメガシワ（とうだいぐさ科の落葉高木）とする二つの説に分けられる⁽³⁾。しかし、『萬葉集評釋』（窪田空穂）が述べるように、「あかめがしはは、夏季、黄緑色の花が咲き、きささげは初夏、緑色の花が咲く。いづれも春の花ではないので、問題となる。」とされる。確かに、各種植物事典には、アカメガシワ (*Mallotus japonicus*) という植物は、「花は夏、雌雄異株。」⁽⁴⁾、「雌雄異株。花期は7月。」⁽⁵⁾などと説明されており、また、キササゲ (*Catalpa ovata*) については、「花は初夏（後略）」⁽⁶⁾、「6-7月に開花。」⁽⁷⁾といった記述が見られる。

キササゲ、アカメガシワの二説のほかに、「久木」は「久しき木」の意で「去年咲し花の後は、久しくして、亦此春、咲いふ心」とした『萬葉集管見』（下河辺長流）の説が見られる。後に、『萬葉代匠記』精撰本（契沖）もこれに従い、「久シキ老木」の意に解した。

集中に、「久木」を詠んだ例は、他に三例しか見られず、資料は豊富ではない。しかし、それらの「久木」の用法には、幾つかの共通点が見出せる。

ぬばたまの夜よのふけゆけば久木生留ひさかた清き川原かはらに千鳥ちどりし
ば鳴く (巻六・雑歌・山部宿禰赤人・九二五)
波の間なゆ見ゆる小島こしまの浜はま久木久ひさしく 成奴君なるぬに逢あはずして
(巻十一・二七五三)
度会わたらいの大川おほの辺への若歴木わかひさぎ吾久わがひさかた在者あ妹恋いもこひむかも
(巻十二・三二二七)

確かに、「久しく月日を経た木」の意味で用いている二七五三及び三二二七の「久木」からしてみれば、長流や契沖が、当該歌の「久木」を、「久しき木」「久シキ老木」と解するのは、理解できなくはない。しかし、二七五三と三二二七の「久木」は、下に続く「久しくなりぬ」「久ならば」を導き出すために、序詞として用いられたものである。

更に、「久木生ふる清き川原」(九二五)、「小島の浜久木」(二七五三)、「大川の辺の若久木」(三二二七)と詠まれているように、右の三例はいずれも、水辺に生えている「久木」として描かれている。また、『萬葉集』以後の用例を調べてみると、右の歌などから影響を受けている可能性は勿論視野に入れておかなければならないが、後世の和歌における「久木」は、「清き川原」や「小島」以外にも、「うら」「みちぬるしほ」「なみうつきし」「浪こす磯」「おきのす」「しまが崎」などといった言葉と共に用いられており、やはり水辺に自生していたことを示している。

考えられる。

『日本の野生植物 本文Ⅱ』によれば、キササゲは、「しばしば人家近くの川岸などに野生化している。」とされ、また、『改訂版 原色牧野植物大圖鑑 合弁花・離弁花編』にも「庭に栽植され、ときに河岸などに野生化している中国原産の落葉高木。」と、類似的の記述が見られる。なお、次のような、方言の面から行われた考察も興味深い。

『万葉集』には、「ひさぎ」を川辺に生える木として詠み、また、「浜久木（二七五三）」ともいうのは、この木が多く河畔に自生し、「かはらさゞげ（濃州）かはらざり（常州）かはらひさぎ（筑前）かはらくさぎな（石州）かはらかしは（勢州）（重訂本草綱目啓蒙・三二）」などの方言があることと合致する。

『角川古語大辞典』

また、右の他に、「かわらひしやぎ」（長崎（壱岐島）の方言もキササゲにあるといふ。¹⁰）

一方、アカメガシワの自生地に関しては、河岸などと特定されてはいない。とは言え、アカメガシワにも実は、「かわらひしやぎ」（岡山）の方言が見られ、更に、「ひさき」（鹿児島（鹿児島市・桜島））、「ひさげ」（高知（幡多）、宮崎（児湯））、「ひさげのき」（宮崎（児湯）、鹿児島（加治木・蒲生））、「ひしやげ」（高知（幡多・高岡））、「ひしやげのき」（高知（高岡））なども記録されている。¹¹。

こうなると、「久木」が表すのは、アカメガシワか、それともキササゲか、いよいよ決しがたいが、「久木」がそのいずれかに当たるとはおそらく間違いないだろう。

ところが、先にも述べたとおり、当該歌の「久木」に関しては、春の歌に詠み込まれている点から考えると、アカメガシワにせよ、キササゲにせよ、どちらも夏に開花する花である限り、依然として、この「久木」に相当する資格が問われかねない。のみならず、「久木」を詠み込んだ他の歌においては、河畔や浜などとの関わりが濃厚であるにも拘わらず、そうした水辺に関連する描写は、当該歌には一切ない。反対に、当該歌に見られる「久木今咲く」「地にか落ちむ」といった、特に花の開花や落花と関係する言葉は、集中における他の三例のいずれにも詠み込まれていない。また、後代の「久木」の例においても、「咲く」などとは描写されておらず、専ら「生ふ」という動詞が用いられている。

当該歌の原文「久木」を信ずるとすれば、「ひさぎ」と訓むほかないだろう。しかし、右に述べたとおり、アカメガシワ、キササゲ、両説に花期の問題がある上に、当該歌と、集中に見られる「久木」の他の三例との間に、用法上、明らかな相違が見られるのである。そうであるとすると、やはり、当該歌に「久木」が詠み込まれるのは不自然で、懐疑の念を拭えない。こういう場合、一度、「久木」の原

文を根本から見直し、その是非を問う必要があるように思う。その考察は後述するとして、まず先に、春の花が集中において、どのような扱いをされているかを見てみたいと思う。

二

『萬葉集』の中に、毎年春になると、梅の木は新しい花を付けるのに対し、人間ばかりは老いて行くと詠んだ次の歌が見られる。

年のはに梅は咲けどもうつせみの世の人我し春なかりけり
(卷十・春雑歌・一八五七)

また、花は詠み込まれていないが、「冬過ぎて春の来れば年月は新たなれども人は古り行く」(同・歎旧・一八八四)も類似した発想に基づくものである。人命の儂さを詠むために、人間を周囲の自然と対比して描写することがあったのである。次の挽歌の場合、去年見た秋の月は、今年も変わらず光を照らしているが、妻は儂くも帰らぬ人となつたと詠んでいる。

去年見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年離る
(卷二・柿本人麻呂・二一一)

新日本古典文学大系『萬葉集一』に指摘されているように、右は、「悼亡」と題した、梁の沈約の「去秋三五の月、

今秋還た房を照らす。今春蘭蕙の草、來春復た芳を吐く。悲しいいかな人道は異り、ひとたび謝すれば水く銷亡す。…」

『玉臺新詠』巻五)に酷似した趣がある。沈約の詩も妻の死を悼んで詠んだものであることを考えると、人麻呂の挽歌との類似は顕著である。しかし、人麻呂の挽歌に限らず、蘭蕙が来年の春になれば再び芳しい香りを放つと表現されているところから、毎春花開く梅に對して、わが身は古びる一方だと詠んだ「年のはに梅は咲けども…」(一八五七)なども発想上共通していると言えよう。このような発想は、平安時代の歌人の歌にも見られ、好まれた趣向だったようである。

桜の花の下にて、年の古いぬる事を嘆きて、よめる
紀友則

色も香もおなじ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける
『古今和歌集』・春歌上・五七
題しらず 読人しらず

百千鳥さへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく
(同・二八)

これらの場合も、たとえば「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず。」(年年歳歳花相似、歳歳年年人不同)(初唐・劉希夷・「代悲白頭翁」)などに代表される発想に学んだものとされ、やはり中国文学との関連が濃厚である。

ところで、春花や春草が年毎に改まるものとして漢詩文に詠み込まれるのは、右の詩のように、人命のもろさ儻々と對比する場合に限らない。春の到来に伴って再び咲く花を、移りやすい人間の心と対照的に描写した詩も、たとえば『玉臺新詠』や『藝文類聚』に窺われる。

春日

高臺春色動き、
清池日華に照らさる。
緑葵光に向ひて轉じ、
翠柳風を逐ひて斜なり。
林に驚心の鳥有り、
園に奪目の花多し。
相與にするは咸節を知る、
歎ず子が獨り家を離るるを。
行人今返らず、
何ぞ勞せん空しく麻を折るを。何勞空折麻

(梁・聞人蒨・『玉臺新詠』卷八)

右の「相與にする」とは、その前に描かれている葵、柳、鳥、そして花のことであって、それらは全て春という季節をよく知り、その到来に伴って栄えるのに、旅に出た夫ばかりは帰らぬと妻は嘆く。次の詩も同じ発想に基づいているので、参考に挙げておく。

花は開くも人は歸らず、節暖なり衣すべからく變

ずべし。…(花開人不歸節暖衣須變)

(梁・劉孝威・「春宵」・『藝文類聚』「閨情」)

…芳年には華月有るも、佳人は還る期無し。…(芳年有華月佳人無還期)

(宋・劉鑠・「代行行重行行」・『玉臺新詠』卷三)

こうして、春季に女性が男性を慕い、恋に悩むのを描くのは、そもそも陰陽思想と関係を持つものと考えられる。「春女は思ひ、秋士は悲しみて、物の化するを知る。」(春女思秋士悲而知物化矣)『淮南子』「繆称訓」(十二)にも示されるように、即ち、春は、陰物とされた女性が、陽物とされた男性を慕う季節(秋は逆に男性が女性を思う季節)と考えられていたのである。

なお、先に見た「春日」「春宵」のように、春を時節とした閨怨詩では、男性はまさしくその春という時節に、遠地から妻の許へ帰るべきものという設定になっていることが多い。

行人に寄す一首 寄行人一首

桂は吐く兩三枝 桂吐兩三枝

蘭は開く四五葉 蘭開四五葉

是の時君歸らず、 是時君不歸

春風徒に妾を笑ふ。 春風徒笑妾

(宋・鮑令暉・『玉臺新詠』卷十)

庭中に奇樹有りに擬す 擬庭中有奇樹

歡友は蘭時に往き、

歡友蘭時往

迢迢として音徹匿る。

迢迢匿音徹

虞淵は絶景を引き、

虞淵引絶景

四節は逝くこと飛ぶが若し。

四節逝若飛

芳草は久しく已に茂り、

芳草久已茂

佳人は竟に歸らず。

佳人竟不歸

(後略)

(晉・陸機・同・卷三)

昔期今未だ反らず、春草寒くして復た青し。君を思

ひて轉易無し、何ぞ北辰星に異ならん。(昔期今未反

春草寒復青 思君無轉易 何異北辰星)

(梁・何遜・「閨怨」・同・卷五)

征人別來久し、年芳復た牖に臨む。…(征人別來久

年芳復臨牖)(梁・庾肩吾・「應令春宵」・同・卷八)

春の到来に伴い、花が咲き始め、木々や草が芽を吹き出して茂るようになることを、一種のバターンとして用いるのは、先に述べたように、家に帰らぬ夫と対比するための工夫と考える。しかし、男女の間柄と対比するためのみに用いられるのではなく、これらの花や草木の再生は、夫が戻るはずである春という季節そのものを、象徴し印象づけるものとしても機能していると考えべきではないか。

これまで挙げてきた『玉臺新詠』や『藝文類聚』などの漢詩が、萬葉の歌人に影響を与えたことは周知の通りであるが、『萬葉集』に、春の閨怨を匂わせる歌が何首か見ら

れ、中には、春の花の開花を詠み込んだものもある。

恋ひとつも今日は暮らしつ霞立つ明日の春日をいかに

暮らさむ (卷十・春相聞・一九一四)

冬ごもり春咲く花を手折り持ち千度の限り恋ひ渡るか

も (同・一九九二)

梅の花散らす春雨いたく降る旅にや君が慮りせらむ

(同・一九一八)

春の野に霞たなびき咲く花のかくなるまでに逢はぬ

君かも (同・一九〇二)

春花のうつろふまでに相見ねば月日数みつ妹待つら

むそ (卷十七・大伴宿禰家持・三九八二)

石川大夫、任を遷されて京に上る時に、播磨の

娘子の贈る歌二首(その一)

絶等寸の山の峰の上の桜花咲かむ春へは君し惚はむ

(卷九・一七七六)

特に最後に挙げた播磨の娘子の歌は、春の閨情を色濃く示していると言えないだろうか。また、閨怨詩には、夫の帰りを待ちわびて、化粧直しもせず鏡を取る気にもなれない妻の様子を描写した下りが見られる(「涙容曠しく飾らず、幽鏡復た治め難し。」「涙容曠不飾 幽鏡難復治」(宋・劉鑠・「代行重行行」・『玉臺新詠』卷三)、「君の出でしより、明鏡暗うして治せず。」「自君之出矣 明鏡暗不治」(魏・徐幹・「室思一首三章」・同・卷一)他)。播磨の娘子

が贈った二首のうち、一七七七番の方では、「君なくはなぞ身装はむくしげなる黄楊の小櫛も取らむとも思はず」と詠まれており、この一連の作はやはり閨怨詩に学んだ可能性が高いと考えられる。

また、一九〇二番は、先に挙げた陸機の「芳草は久しく已に茂り、佳人は竟に歸らず。」の発想と共通していると言え、「春花のうつろふまでに相見ねば……」（三九八二）と詠んだ家持の歌の場合、たとえば、春の閨怨を述べた次のような詩句と通じる趣である。

…春度るも人歸らず、花を望めば盡く葉と成る。（春度人不歸 望花盡成葉）

（梁・蕭子顯・「春閨思」・『玉臺新詠』卷十）

…故人何ぞ返らざる、春華復た應に晚るるなるべし（故人何返 春華復應晚）

（梁・柳惲・「江南曲」・同・卷五）

これらでは、晩春に近づき、開花した花が散り落ちて行く様子を描写することによって、夫が家に戻ってくるはずの春が、次第に過ぎ去って行くことを象徴し強調する狙いがあつたと思われる。

更に言えば、右のような詩に見られる落花を、あるいは、男女の恋が、最早元の状態に戻れないことを含意するものと捉えることも可能であろう。たとえば、留守居の妻の心境を語った、魏の徐幹の「室思一首」（二章）は、

…君去つて日に已に遠し、鬱結人をして老いしむ。
人生一世の間、忽として暮春の草の若し。時は再び
得可からず、…（君去日已遠 鬱結令人老 人生一世間
人生一世の間、忽として暮春の草の若し。時は再び
得可からず、…）

忽若暮春草 時不可再得

（同・卷一）

とある。暮春の衰える草に譬えて、夫と共に過ごした日々は二度と巡つてこないと悲嘆する妻の姿が窺える。

閨情を表した以上のような詩においては、春の花は二通りの機能を持つているものと考えられる。大きく分けると、春の花（または草）の再生を描写した場合の機能と、花が衰えて散り行く様子を描写した場合の機能である。春になつて再び開花した花は、家に帰らぬ夫と対比され、また、帰ってくるはずであるその時期——つまり、春という季節——を象徴するものである。一方、春の花の落花は、夫が家に戻らないまま、春が空しく過ぎ行くことを意味し、また、場合によって、最早男女の恋が元に戻ることもなく、儚い結末を迎える象徴として詠み込まれるものである。

『萬葉集』の歌においても、春の落花を、比喩的にまた寓意的に用いる場合がある。たとえば、厚見王が久米女郎へ贈つた一首「やどにある桜の花は今もかも松風速み地に散るらむ」（巻八・一四五八）に對し、女郎は、うつろいやすいその桜の花に譬えて、男の心変わりをほのめかす次の歌を返している。

世の中も常にしあらねばやどにある桜の花の散れるこ

ろかも

(同・一四五九)

以上のように、春の開花、そして春の落花を詠み込んだ集中の歌において、中国文学の閨怨詩に見られる春の花の扱い方と共通する点を確認することができた。では、これまでの春の花に関する考察に照らし合わせながら、本稿後半では、当該歌における「久木」の問題に戻り、再度検討してみたいと思う。

三

去年咲きし久木今咲くいたづらに地にか落ちむ見る人なしに
(一八六三)

改めて当該歌を眺めてみると、「去年咲きし…今咲く」「いたづらに地にか落ちむ」「見る人なしに」と、春の到来に伴い花が再び花開く様子、また、春の花が空しく散り行く様子を描写するという、前節で述べた閨怨詩にあつたような方法を匂わせる語句が、当該歌の随所に用いられていることが明らかである。

現に、諸注釈書の中には、前年は恋人と共に花を見たが、今年はその人が居ないので、花は無駄に散って行くのであるかと、男女の別離を背景にして詠んだ歌と捉える説が見られる。

去年咲之といつて見人名四二と受けてゐるのは、去

年愛人と共にこの花を眺めた事實があつたのであらう。さして深くはないが、感傷的な気分が籠つてゐる。
(鴻巣盛廣『萬葉集全釋』)

また、佐佐木信綱氏は、当該歌の評釈に際して、

人に知られず咲いて、人に知られず散つてゆく久木に對する愛惜の情をのべたもので、別に寓意がありさうにも思はれない。
(『評釋萬葉集』)

と一旦述べた上で、

或は花そのもの何でもないが、去年咲いた時は共に眺める人があつたのに、今年はそのがあないといふ惆悵の情をこめたものかとも想像される。(同)

といった考察を付け加えている。

なお、次の一首のように、集中に当該歌と酷似した歌が見られる。

我がやどの花橘はいたづらに散りか過ぐらむ見る人なしに
(卷十五・中臣朝臣宅守・三七七九)

右は、作者宅守が越前国に配流されたとき、妻の狹野弟上娘子と贈答した歌の一首である。妻と離れ離れになることを強いられ、主である自分が家に居ないので、橘は空しく散っていることだろうと詠んでいる。ここでは、「見る人なしに」の「人」とは、宅守自身を指すのである。

とは言え、右のような例のみを根拠に、当該歌の「人」という人物が、作者の恋人を指すものと断じることが、無

論できない。男女の恋愛とは関係なしに、「いたづらに」

「見る人なしに」など、類似表現が詠み込まれている歌も

集中にあるので、一概には言えないのである。当該歌の

「人」は、あるいは、朋友を意味するとも、また、世間一

般の人々を意味するとも受け取れるであろう。実質上「人」

が誰を意味するかについては、最早今日に至っては、議論

したところで答は想像の域を出ないものである。

しかし、当該歌に用いられている発想や、描写方法、表

現などを、文学的に考察を試みるとするのであれば、当該

歌は、男女の別離を主題とする、春の閨怨詩の描写方法や

発想を、その背景に持つていると見ることは充分に可能な

はずである。

春日

春還りて 春節美なり、
春還春節美

春日春風過ぐ。
春日春風過

春日日に異なり、
春日日日異

春情處處に多し。
春情處處多

處處に春芳動き、
處處春芳動

日日に春禽變ず。
日日春禽變

春意は春に已に繁り、
春意春已繁

春人は春に見えず。
春人春不見

(中略)

春人竟に何にか在らむ、
春人竟何在

空爽やかなり上春の期。 空爽上春期

獨り春花の落つるを念ひ、 獨念春花落

還た昔春の時に似たり。 還似昔春時

(梁・元帝・『藝文類聚』「春」)

前節に何首か挙げた春の閨怨詩と同様、右の詩も、旅先か

ら戻らない夫に対する妻の怨みを詠んだものである。周囲

は以前と変わりなく、また春めいてきたにも拘わらず、夫

の姿は見られず、妻は独りで春花の落花を思いつつ春の日

々を過ごすのである。

春の花を詠む歌として配列されている当該歌に、夏に開

花を遂げる「久木」を詠み込むことが妥当でないことは、

先に述べたとおりである。しかし、そればかりでなく、右

の「春日」も含めて、以上見てきた春の閨怨詩と、趣や表

現方法の上で共通していることを視野に入れば、夏に咲

く「久木」がそぐわないということは、尚更はつきりして

くるところ。

「久木」の問題について、以前から多くの注釈書は、「久

木」が別の文字の誤写である可能性を指摘してきた。「久

木」でないとするれば、本来どのような花が詠み込まれてい

たと考えられるであろうか。まず二つの条件を念頭に置い

て考える必要がある。一つは、春の到来に伴って「今咲く」

と表現するに相応しい花でなければならぬこと、もう一

つは、その花を表記する文字が、「久木」と見間違えられ

やすいものでなければならぬことである。

結論から言うと、「久木」の「久」は、「冬」の字を誤って写したものではないかと思われる。即ち、「久木」ではなく、本来「冬木」（ふゆき）だったと考えるのである。

去年咲きし冬木今咲くいたづらに地にか落ちむ見る人なしに

「冬」を「久」に誤ったとする説は、既に、賀茂眞淵の『萬葉考』に見られるものである。

考るに久は冬の字にて集中に冬木の梅とも（巻十二）に冬木の上に降雪ともよみしかば即冬隠せし木のまゝにて今春咲をいひてこも梅の歌歟

（『萬葉考』「卷七之考」）

この「冬木」誤字説は、今までほとんど顧みられることがなかったようである。しかし、少なくとも、先に述べた二つの条件のうち、「久木」と見間違えられやすい字でなければならぬという条件は、満たすものと考えられる。

今日に伝わっている諸本には、「冬木」と書いたものは見られないが、「久」、「冬」、両者の字形が類似していることを考えれば、現存する『萬葉集』の資料が書写される以前に（即ち、草書体で資料を書写したと考えられる段階において）、「冬」を「久」に誤った可能性はあり得るだろう。

では、もう一つの条件に関してはどうであろう。果たし

て、「冬木」は、春の到来に伴って「今咲く」と表現するに相応しいものと言えるであろうか。まず、集中の「冬木」の例及びその用法を見てみよう。

大伴宿禰家持の雪梅の歌一首

今日降りし雪に競ひて我がやどの冬木の梅は（冬木梅

者）花咲きにけり（巻八・冬雑歌・一六四九）

巨勢朝臣宿奈麻呂の雪の歌一首

我がやどの冬木の上に（冬木乃上尔）降る雪を梅の花

かとうち見つるかも

（同・一六四五）

前者は、春を間近にして、越冬していた梅の木が、雪に負けまいと早くも花開いたことを詠んだ一首である。後者の場合も、同じく、枯れ木の状態で越冬した梅の木を表現するために、「冬木」を詠み込んだものである。ただ、ここでは、実際にその梅の木が花を咲かせたのではなく、枝に降り落ちた雪を、梅の花と見間違えてしまったと詠んでいる。このような例が存在することを考えれば、眞淵の解説にもあるように、当該歌において、春の到来に伴ってそれまで越冬していた梅の木が開花したのを、「冬木今咲く」と詠んだと考えるのは、一首を解釈する上で何ら無理はないと思う。

『萬葉集』に見られる「冬木」の例は右の二首に留まる。

そのほか、上代の例としては、大雀の命（仁徳天皇）の御刀を目にし、吉野の国栖が歌った「品陀の日の御子大雀

大雀おほさざき 佩はかせる太刀たち 本もとつるき 末すまふ振ゆるゆ 冬木ふゆき (布由紀) の素幹すからしたきが下木したきの さやさや」(『古事記』) が挙げられる。

ところで、眞淵は、当該歌に関して「冬木」の二字を、

「ウメハ」と訓ませている(『去年咲之冬木今咲く』)。しかし、『古事記』の歌謡に「布由紀」とあるところから、「ふゆき」の訓が実際に用いられていたことが確認され得る。

なおその上、「春」や「時」に掛かる「ふゆごもり」という枕詞を、「冬木成」と表記した例は『萬葉集』に四例見られるものの、和歌において「冬木」の二文字に対し、「うめ」と訓ませている例は管見の限り、見当たらない。尤も、先に挙げた集中の二例(「冬木梅者」「冬木乃上尔」)では、仮に「うめ」と訓ませた場合、共に、「梅」という言葉が既に用いられているため重複する。またその上、言うまでもなく、字足らずにもなる。このように考えると、敢えて、当該歌のみにおいて、「冬木」を「うめは」と訓ませる必然性はなく、文字通り「ふゆき」と訓んで差し支えないと思う。

ただし、このように、問題の二文字を「冬木」の誤写とした場合、解釈の上では、梅の木を意味している可能性は高いと考えられる。当該歌が配列されている「詠花」歌群では、「梅」と「桜」を詠み込んだ歌が圧倒的に多い。契沖は、当該歌の「去年咲きし久木今咲く」について、「久しきの木の心なり」としながら、「第十二梅櫻ヲヨメル中

二、去年咲シ久木今サク徒ニツチニヤオチム見ル人ナシニト云哥ノハサマレタルハ、梅櫻ノ内ヲヨメリト見ユ。二二」
とも説いている。勿論、「梅」が詠まれている歌数や、前後の歌の内容によつて、梅の木を指していると断定するわけには行かないが、「詠花」歌群に見られる傾向や共有点を、視野に収めておく必要もある。

集中の「冬木」の用例は少ないものの、先に見たとおり、「冬木」を用いた一六四九と一六四五は、晩冬に咲き始めた梅の木を描写し、もしくは梅の開花を連想させる歌であった。時代を降ると、冬の到来に従つて、枝の葉が落ち、枯れ木と成つてしまふ樹木を、「冬木」と描写する方法が、次第に多く用いられるようになる。平安中期の女流歌人、康資王母が詠んだ次の歌はその一例である。

さうしのゑに木ずゑに残りたる紅葉に雪かかり
たるを

山里のみみぢ過ぎぬる冬木には雪の初花咲きかへてけり
『康資王母集』・七一

しかし、先に見た『萬葉集』の「冬木」の二首のように、春の接近もしくは到来に従つて、初開花を遂げる梅を描写したり、または降雪をそうした早梅の花に見立てたりする歌も散見する。

雪深き冬木の梅の匂ふより春のちかさもしるき頃かな

〔後鳥羽院定家知家入道撰歌〕・衣笠家良・四九）
年内鶯

もろともに春待ちわびてさきそむる冬木の梅にうぐ
ひすぞなく

〔隣女和歌集〕・冬・飛鳥井雅有・一三五二）
雪中早梅

冬木もおほえぬほどのさかりかな雪に色そふ梅の
はつ花

〔熱田本日本書紀紙背懷紙和歌〕・琳阿・四一六）
いとはやも冬木ながらにさく梅はまぢかき春をいそ
ぐとやしる

〔前撰政家歌合〕・侍従藤原為季朝臣・三二七）
落梅

冬木より咲きそめし梅は雪ながらおちて衣に匂ふ春
風 〔通勝集〕・春部・中院通勝・九七三）

早梅
花なしとおもひはててし冬木にもかたえは春の梅ひ
らくなり

〔芳雲集〕・冬部・武者小路実陰・三一五〇）
雪のふりたる日友だちの許によみてやる

わがやどの冬木の上にあわ雪にふらえてさける梅の
花… 〔八十浦之玉下卷上〕・長田鶴夫・八四七）

右のような、鎌倉から江戸時代にかけての歌から見ても分

かるように、春の到来もしくは接近に伴って、早々に梅が
花を付けると詠む歌で、その梅を「冬木」と表現するのは、
『萬葉集』以後も、後々まで好まれ継承されたと見られる。

「冬木」という表現を以上のような歌に詠み込んでいる
のは、季節の推移、更には梅自体の目覚ましい変化を、強
調し印象づけるための、一つの工夫であると言えよう。つ
まり、それまで枯れ木であった梅を「冬木」という表現を
用いることによって、逆に、それとは対照的な春めいた梅
の様子を、一層際立たせる効果があるわけである。また、
そのように「冬木」を用いることにより、間接的には言
え、季節の推移に対する作者の自覚も、同時に読者に伝え
ることができるようではないか。『連歌諸躰秘伝抄』に、「山
となるといふに塵つもる、春になるといふに冬木の梅など
と付候はば、躰をとり出す付やうになり候べく候。」
とある記述も興味深い。このように考察してみると、
春に初開花を遂げる花としては、縁遠い「久木」を詠み込
むよりは、やはり「冬木」を詠み込む可能性の方が、遙か
に高いということが明らかであろう。

花を詠んだ例ではないが、当該歌が配列されている同じ
卷十の春の雑歌に、「霜枯れの冬の柳」と表現した歌が見
られる。

霜枯れの冬柳者見る人の縷にすべく萌えにけるか
も 〔二八四六）

それまで越冬していた柳が、春の訪れに従って、新芽を出した実感を表した一首である。この場合も、「霜枯れの冬の柳」と描写しているのは、やはり季節の推移と、それまでとは打って変わって春らしく芽を吹き出した柳の様子を、意識させるためのものと考えられる。先に挙げた「雪深き冬木の梅の匂ふより…」の作者でもある衣笠家良の詠「春かぜのこほりふきとく川ぎしの冬木のやなぎいろづきにけり」(『新撰和歌六帖』・はるのかぜ・三四六)の「冬木のやなぎ」にも、同じ機能が託されていると言えよう。

なお、春の到来もしくは接近を描写した歌において、とりわけ梅の開花を描くのは、梅を、春咲く花の中では最も早く——時には、まだ雪に見舞われる冬の内にも——咲き始める花とする、萬葉の頃から見られる描写方法と関係していると思われる。

春さればまづ咲くやどの梅の花ひとり見つつや春日暮らさむ
(巻五・山上憶良・八一八)

県犬養娘子、梅に寄せて思ひを発す歌一首

今のごと心を常に思へらばまづ咲く花の地に落ちめや

しほす
も
十二月には沫雪降ると知らねかも梅の花咲く含めらす

して
(同・紀少鹿女郎・同・一六四八)

雪見ればいまだ冬なりしかすがに春霞立ち梅は散り
つづ
(巻十・春雑歌・「詠花」・一八六二)

梅が殊更に早く咲くという発想は、諸家の指摘のとおり、そもそも漢詩に学んだものと考えられる。たとえば、山上憶良及び県犬養娘子の歌で、梅を「まづ咲く」花と表現しているのは、梁の簡文帝の「採桑」に見られる「先づ發く院邊の梅」(先發院邊梅)、『藝文類聚』(桑)などに拠ったものと思われる。「梅花特に早く、偏に能く春を識る」(梅花特早 偏能識春) (同・「梅花賦」・同・「梅」)や、「春を迎へ故に早に發き、獨自り寒きに疑はず」(迎春故早發 獨自不疑寒) (陳・謝燮・「早梅」・同)にも、同じ趣向が窺える。また、冬の十二月の内に、梅が既に咲いたと詠んだ紀少鹿女郎の歌などは、隋の江總が詠じた「梅花落」の冒頭部「臘月正月早に春に驚き、衆花未だ發かざして梅花新たり」(臘月正月早驚春 衆花未發梅花新)、『藝文類聚』(梅)と共通するところがある。ここに見る「臘月」とは、陰曆十二月のことで、冬の十二月とも、春の正月とも、分別が付かないほど早い春の到来に驚き、他の花がまだ咲かないうちに、梅はもう花を付け始めた、という。北周の庾信の「常年臘月半ばにして、已に覺ゆ梅花の蘭なるを」(常年臘月半 已覺梅花蘭)、『詠梅花』(「初學記」)「梅」も、似た発想に基づいている。

ところが、萬葉の歌人が梅を歌に詠み込む際に、中国の文学から学び取ったと思われるのは、右のような、梅が逸早く花を付けるといふ特質を描写する方法に限らない。先

に見た、「梅に寄せて思ひを発す」と題した泉犬養娘子の歌（一六五三）では、「まづ咲く花」は漢詩文に学んだものと述べたが、それ以外にも、たとえば、恋の行く末を案ずる思いを梅花に託して詠んでいるのは、六朝の詩人が閨怨詩に梅の落花を詠み込んでいるのと関連があるであろう。

…春情柳色に寄せ、鳥語梅中に出づ…落花徒に戸に入り、何ぞ解かむ妾床の空しきを（春情寄柳色 鳥語出梅中…落花徒入戸 何解妾床空）

（梁・蕭子範・「春望古意」・『藝文類聚』「春」）

なお、もともと楽府の一つであった「梅花落」と題する曲が、六朝以来幾つも作られてきた。先に触れた江總の「臘月正月早に春に驚き…」もその一例である。東茂美氏は、そうした「梅花落」の詩を例に取り上げ、「うたわれるのは、春恨を抱きながら窓外の梅樹を眺め、楼台をまた園庭を逍遙する閨怨に焦がれる婦女の姿である。」¹¹³と述べている。こうした「梅花落」という詩の枠を借り、たとえば平安時代の日本の詩人は、次のような漢詩を詠んでいる。

鷓鴣鳴きて梅院暖けく、花落ちて春風に舞ふ。歴亂飄りて地に鋪き、徘徊颺りて空に滿つ。…傷離の苦しみを験みまく欲せば、應に聞くべし羌笛の中。

（鷓鴣梅院暖 花落舞春風 歴亂飄鋪地 徘徊颺滿空… 欲驗傷離苦 應聞羌笛中）

（『文華秀麗集』・「梅花落」・嵯峨天皇）

春風物を吹きて暖けく、朝夕庭梅を蕩がす。花は點く紅羅の帳、香は禁る玉鏡の臺。…未だ度らず征人の意、空しく勞く錦字を廻らすことに。（春風吹物暖 朝夕蕩庭梅 花點紅羅帳 香禁玉鏡臺…未度征人意 空勞錦字廻）

（同・「奉和梅花落」・首原清公）

更に、梅の落花ばかりでなく、梅が前年と変わりなく再び開花を遂げる様子を描いた詩も見られる。

梅を詠む 詠梅

梅は含む今春の樹、梅含今春樹
還た臨む光日の池。還臨光日池
人は前歳の憶ひを懐き、人懐前歳憶
花は故年の枝に發く。花發故年枝

（梁・元帝・『藝文類聚』「梅」）

無論、右の一首は必ずしも、閨怨詩のごとく男女の間柄を主題としたものとは断言できない。しかし、この作品が先に見た「春日」（獨り春花の落つるを念ひ、還た昔春の時に似たり。）と同じ作者の手によるものであること、また両者の趣が著しく共通していることを考慮すれば、やはり、男女の間柄が元帝の脳裏にあつて、右を詠んだと見るのが自然ではなからうか。

以上のように考察してみると、当該歌において、「去年

咲きし」「今咲く」「徒に」「地にか落ちむ」と表現される対象が、梅であつて、決して何ら不思議はない。むしろ、以上述べてきた春の閨怨詩との関連を考察することによつて、逸早く咲き始め、待ちに待った春を告げるという梅こそが、当該歌に詠み込まれてしかるべきものであることが、一層はつきりしてくる。梅の初開花を目にし、長く待ち望んだ春の到来を、作者は実感する。しかし、実感すると同時に、本来ならば共に見るべき人が居ないゆえに、梅の花は空しく散つてしまふのさうかと、作者の心境は案じる方向へと展開する。そうした梅を詠み込むことを可能ならしめるのは、当該歌にあつては、「冬木」の二文字をさしおいて、稿者には思い付かない。

むすび

眞淵が提唱した数々の誤字説は、その全てが、必ずしも評価を得てきたわけではない。当該歌の場合でも、眞淵の説は今までほとんど顧みられることがなかったのである。

しかし、当該歌を、春の閨怨詩の面から考察を試みたところ、発想、また描写方法の上でも、共通していることが判明した。春を告げる花として当該歌に詠み込むに、最も相応しいと考えられるのは、早春、真つ先に咲き始める梅であり、その梅を「冬木」の二文字で表したのではないかと

論じた。

従来の説においては、「久木」が夏に開花する花であるため、春の歌に配列されている当該歌に詠み込むのは疑問だと、しばしば指摘されてきたものの、主として、当該歌の配列の位置のみから、疑問視されてきた節があるように思う。しかし、本稿で述べてきた考察に大過がなければ、当該歌が春の歌に配列されているという点ばかりでなく、中国の春の閨怨詩の発想や描写方法を基盤にしているという点も視野に入れることによつて、春に相応しい花を要することは、尚一層明らかになつてくる。春の花として、「冬木（の梅）」は、歌の配列に限らず、春の閨怨詩を背景に持つ当該歌の解釈にまで、関与していったということになる。去年咲きし冬木今咲くいたづらに地にか落ちむ見る人なしに

一首に詠われている花の、春の花としての性質が、作者の意図したところを汲み取る上で、とりわけ重要であつたのである。

(注)

※特に断らない限り、本稿における詩歌・物語の引用は、次のものによつた。なお、引用中の傍線・傍点・文字囲いは稿者によるものである。

日本古典文学大系(岩波書店)『古代歌謡集』(昭和三十二年)、

『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(昭和三十九年)

『日本古典文学全集(小学館)』『萬葉集』(昭和四十六〜五十年)、

『新古今和歌集』(昭和四十九年)

『新日本古典文学大系(岩波書店)』『古今和歌集』(一九八九年)、

『拾遺和歌集』(一九九〇年)

『日本唱歌集』(岩波文庫、一九五八年)

『新編国歌大観(角川書店、一九八三〜一九九二年)』『康資王

母集』、『後鳥羽院定家知家入道撰歌』、『新撰和歌六帖』、

『隣女和歌集』、『熱田日本書紀紙背懷紙和歌』、『前撰

政家歌合』、『中院通勝集』、『芳雲集』、『八十浦之玉』

『新釈漢文大系『玉台新詠』(明治書院、昭和四十九〜五十年)

『藝文類聚』(上海古籍出版社、一九八二年)。なお、引用

の読み下しは、稿者によるものである。

『初學記』(中華書局、一九六二年)。引用の読み下しは、

稿者によるものである。

『平家物語(一)』(講談社学術文庫、一九七九年)

(一) 本文・読み下しは、新釈漢文大系『日本漢詩』・下(明

治書院、昭和四十七年)によった。

(二) 澤瀉久孝「ひささき」攷、『國語國文研究』第十三号、

昭和三十四年七月。

(三) 牧野富太郎著『原色牧野植物大圖鑑 離弁花・単子葉

植物編』(北隆館、一九九七年)。

(四) 『日本の野生植物 本文I』(平凡社、一九八九年)。

(五) 牧野富太郎著『改訂版 原色牧野植物大圖鑑 合弁花

・離弁花編』(北隆館、一九九六年)。

(六) 『日本の野生植物 本文II』(平凡社、一九八九年)。

(七) 『日本植物方言集成』(八坂書房、二〇〇一年)。

(八) 右に同じ。

(九) 新日本古典文学大系『古今和歌集』(岩波書店、一九

八九年)。

(一〇) 大谷雅夫「受容と変容」『新日本古典文学大系 月報』

九五、二〇〇〇年五月。

(一一) 『萬葉代匠記』、『契沖全集 第三卷』(岩波書店、昭

和四十九年)、一八九頁。

(一二) 『中世の文学 連歌論集(二)』(三弥井書店、昭和五

十七年)所収。

(一三) 『園梅の景——梅花宴歌と梅花落』、『古代文学』、古

代文学会、一九八三年三月、六六頁。

(かわかみ しきこ・本学学術情報メディアセンター助手)